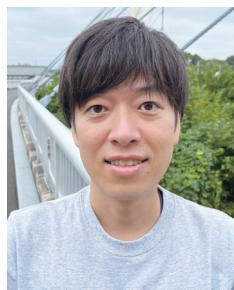


「やりたいことハラスメント(Willハラ)」にご注意を！

神奈川県立横浜瀬谷高等学校

総括教諭

黒崎洋介



『あなたのやりたいことは何ですか？』

『だから先生、私にはやりたいことなんてないですよ！』

「キャリア指導の現場から」というコーナーでありながらいきなり恐縮だが、この教師と生徒のやりとりは直接的なキャリア指導の場面ではない。実はこのやりとりは、高等学校の総合的な探究の時間における「課題の設定」場面をよくみられる一コマである。

高等学校の教育課程は、各教科に属する科目と特別活動、そして総合的な探究の時間から成る。総合的な探究の時間では、その目標を、「探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成すること」としている。

探究とは、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動のことであり、生徒は「①課題の設定」、「②情報の収集」、「③整理・分析」、「④まとめ・表現」という学習過程を繰り返して学習を進めていくこととなる。この学習過程の起点となる「課題の設定」については、生徒が自分で課題を立てることが大切であるとされている。

つまり、誤解を恐れずにいえば、総合的な探究の時間とは、「やらねばならぬこと(Must)」で満ち満ちている学校生活において、生徒自身の「やりたいこと(Will)」が設定できる自由(Freedom)な時間なのである。こうした意味で、総合的な探究の時間は、こ

れからの学校教育を大きく転換させていく鍵を握っている。

その一方で、気がかりなこともある。それは、「課題の設定」において、「やりたいこと」に固執してしまうことである。確かに、一定数の生徒は「やりたいこと」が明確に定まっていたり、教師の指導・助言によって「やりたいこと」を見つけることができたりすること、その自由を謳歌して非常に優れた探究学習を行っている。

しかし、その半面で、冒頭の教師と生徒のやりとりが示すように、一定数の生徒にとっては、「やりたいこと」を設定することが難しく、自由からの逃走(Escape from Freedom)を図っている実情もあるように思える。こうした実情は、授業を担当する教師の「課題の設定こそが困難である」という声によく表れている。

「やりたいこと」とは、自己の興味・関心から生じる「自己課題」であり、その対象を時々によって変えることができる「可変性」をもつものである。「やりたいこと」に対して、一意専心に取り組むことのできる生徒もいれば、移り気な生徒がいることは当然のことであろう。

先に示した総合的な探究の時間の目標に「自己の在り方生き方を考えながら」という文言があるとおり、「課題の設定」は、必然的に自己のキャリア形成の方向性と関連付く。つまり、総合的な探究の時間において「やりたいこと」を選択することは、将来のキャリア選択において「やりたいこと」を選択することと無関係ではない。

将来のキャリア選択において「やりたいこと」ばかりに固執するキャリア指導は、教育社会学において「夢追い型」のキャリア教育といわれる。教育心理学者のジョン・D・クランボルツは、「計画的偶発性理論」において、「個人のキャリアの8割は偶然の出来事によって決まるものである」とし、目標ばかりに固執しすぎることの弊害を説く。

本来、総合的な探究の時間における「課題の設定」においても、将来のキャリア選択においても、「やりたいこと(Will)」と「求められていること(Need)」、「できること(Can)」が重なる積集合が望ましいはずであって、このうちのどこから探し始めてもよいはずである。とりわけ、「求められていること」とは、自己の興味・関心とは切り離された「社会課題」であり、誰かが解決しないかぎりの「不変性」をもっている。

総合的な学習の時間において、自身の「やりたいこと」が見つからない生徒に対しては、「求められていること」から課題を設定させることがあってもよいはずである。「求められていること」に取り組んでいるうちに、自身の「やりたいこと」に気付くことも多くあるだろう。

学校という場所は、生徒の無限の可能性ゆえ、とかく「やりたいこと」を迫りがちである。総合的な探究の時間においても、「やりたいこと」だけに固執しすぎて、「やりたいことハラスメント(Willハラ)」に陥ることは注意したいものである。自戒の念を込めて。